

方広寺跡の調査

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

方広寺は豊臣秀吉が奈良東大寺にならって大仏建立を志し、天正十四年(1586)に造営が開始されました。しかし文禄五年(1596)の地震で大破し、2年後には秀吉は死去します。その後、意志を継いだ秀頼が大仏を復興したのですが、それも寛政十年(1798)に大仏殿に落雷を受けて焼失してしまいました。

現在、往時の様子を残すのは大仏殿正面の門跡と寺域の西・北・南面の石垣、梵鐘ぼんしょうだけとなり、旧境内は現方広寺、豊国神社、京都国立博物館の3箇所分割され今日に至っています。

1998年、京都国立博物館新館周囲の発掘調査を行ない、多くの方広寺関連の遺構を発見しました。次に、おもな遺構を説明します。

石垣・柱穴列 石垣は、現存する石垣の延長上で調査区の西端から東へ約65mにわたって検出しました。南門の西端付近ではほぼ直角に向きを変え、南に延びています。これより東へは創建当初から石垣が築かれなかったものと思われます。使用された石材は、幅約1.8～2.7m、高さ0.5～1.6mもある巨石で、1段目で20石確認しています。石材を切り出したときの矢穴の痕が残っていたり、表面を調整しているものもあります。材質はほとんどが花崗岩です。



写真1 石垣と柱穴列(南東から)



図1 洛中洛外図に描かれた方広寺(西から望む)

大阪市立美術館蔵品選集(昭和61年発行)より部分転載



写真2 南門跡（北から）



写真3 鑄造遺構（東から）

裏込めの礫に混じって石塔・石仏・石碑類が多数出土しています。

この石垣に沿って排水溝と考えられる溝が造られていました。幅約0.5～1 m、深さ0.2 mで底には炭の混ざった土が堆積していました。さらに、溝よりも古い14基の柱穴を検出しました。柱穴列は石の際に並び、大仏瓦が入っているものがあることから、石垣が成立した後に掘られたものと考えられます（写真1）。

南門・回廊 南門の基礎跡を検出しました。礎石は残っていませんでしたが、直径約1.8 m、深さ約1 mの穴に拳大の礫と粘土を交互に詰めた礎石の根固めが10箇所あります。その配置から、門扉の付く中央柱列の前後にそれぞれ4本の柱をもつ八足門であることがわかります。（写真2）。

南門跡の東側では門のものより小さい根固めを8箇所で見出しました。その規模は直径約0.9 m、深さ約0.5 mで拳大の礫に混じって瓦の破片が入っているものもありました。並びが門の東西方向の柱列にそろうことから、ここに回廊が取り付いていたことと、3列並んでいることから複廊であることを確認しました。また南側には、回廊に平行する幅約1.4 m、深さ0.35 mの溝があり、これは回廊にともなう雨落溝と考えられます。溝の中からは多くの大仏瓦が出土しています。

石組溝 石垣の延長上で東西方向の石組溝を検出しました。石は一部抜き取られていましたが、調査区の東端まで続き、さらに東へ延長しています。

鑄造遺構 南へ延びる石垣の西

側で東西約1.8 m、南北約2.8 mの範囲に組まれた木製部材を確認しました。東西の部材の上に南北の材が組まれています。部材の上層は炭と焼土を大量に含む土で埋まり、埋土からは大量の金属の滓が出土しました。また部材の下は一部平瓦を敷き、その下層には防湿のためと考えられる細かい木炭が詰まっていた。規模の大きさから梵鐘や大型製品の鑄造跡と考えられます（写真3）。

今回の発掘調査では、南面石垣のようすや南門が格の高い八足門であること、また回廊が単廊ではなく複廊であることが明らかになりました。これらの成果は絵画資料からはうかがえない新しい発見です。なお、これらの遺構は全面保存される事になりました。

（田中 利津子）

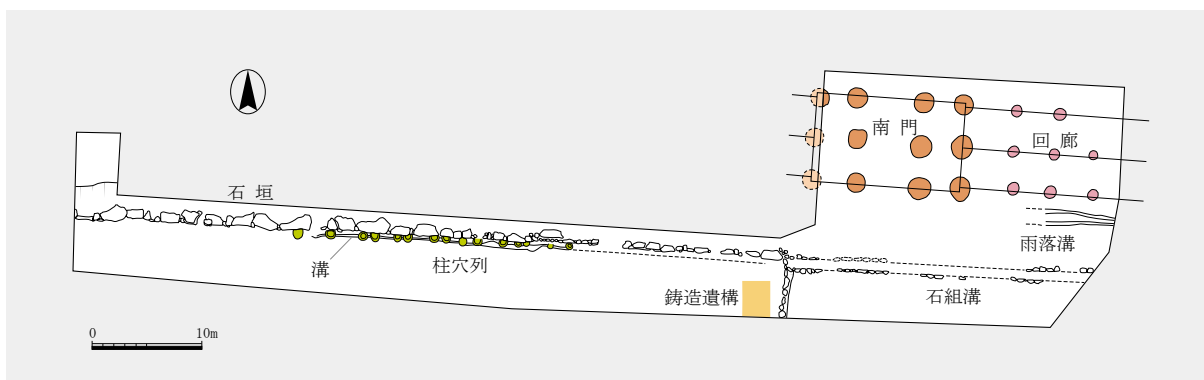


図2 調査区の平面図